



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4071 号 2017.12.11 発行

孫の目線で認知症描く 京都の北川さん初の絵本

神戸新聞 2017年12月10日



認知症や田舎暮らしをテーマにした絵本を初めて出版した北川なつさん=京都市北区

京都市在住の漫画家でイラストレーターの北川なつさん（45）が認知症と田舎暮らしをテーマにした3冊の絵本を初めて出版した。「またあいたいな」と題したシリーズで、いづれも不便さが想起される事柄を、独特の視点で軽やかに描いた。「子どもだけでなく、大人にも広く読んでほしい」と話している。（大久保斉）

北川さんは、佐賀県出身の宮崎県育ち。1995年に漫画家デビューしたが、ヒット作に恵まれなかった。動物好きだったことから、犬を使って認知症の人や障害者らに心身のリハビリを行う「ドッグセラピスト」を志し、2003年から3年間、伊丹市の専門学校に通い民間の資格を取得した。特別養護老人ホームなどでも働き、認知症の人の介護にも携わ

った。

「おばあちゃん パンになる」は、認知症だった祖母の最期を家族で看取（みと）するという内容。パン作りが得意で、いつも絵本を読んでもくれた優しい祖母を孫の目線で回想する。

「おじいちゃん と ぼくと ペロのウンチ」は、認知症のためトイレ以外の場所で用を足してしまう祖父と、おむつが取れない孫のヒロちゃん、飼い犬のペロが、それぞれの粗相をかばい合う物語。

「べんりだね！」は、父親のふるさとの実家で、子どもたちが昔ながらの生活様式に触れ、新たな価値を見いだす内容となっている。

絵本は、認知症を啓発する紙芝居風の動画が土台となった。製薬会社からの依頼で制作したが実現せず、原画を目にした出版元の担当者が北川さんに絵本化を持ち掛けたという。

最近、介護雑誌に漫画を連載したり、認知症ケアの経験を生かした関連本を出版したりするなど活動の幅を広げている北川さん。「認知症や障害者への偏見をなくし、壮絶なイメージのある介護のハードルを下げたい」と強調する。一方で、「田舎暮らしは不便だけど、子どもの目線で見ると楽しい発見の連続」と話す。「3歳の娘に絵本を読み聞かせると、その中に登場するのが自分だと思っているようだ」と笑った。

アルタ出版。各1080円。

発達障害 共感支えに

読売新聞 2017年12月10日

◇米子で交流会「無理解一番つらい」

日野町在住の看護助手、亀山真也さん（27）が、発達障害を持つ大人同士の交流会を

米子市で開いている。自身も20歳の時に広汎性発達障害と診断された。大人の発達障害は外見からは分かりにくく、周囲から理解されず孤立しやすいといい、「悩みを共有し、つながりあえる場所にしたい」と話す。(中田敦之)

「外出する時、着替えが先か荷物の用意が先か、優先順位が決められなくて迷っているうちに時間が過ぎ、約束に遅れてしまう」「障害は不便だけど、つらいわけじゃない。周りに理解してもらえないことが一番つらい」――。11月25日、米子市の食堂で開かれた交流会で、発達障害を持っていたり、障害の傾向があると診断されたりした人ら15人が思いを打ち明け合った。

発達障害があることで感じる悩みなどについて話し合う亀山さん(左端)ら(米子市で)

交流会「マイペース」は、亀山さんが8月から始めた。伯耆町出身で、徳島市内の大学を卒業後、保育士として同市内の保育所で働いていたが、子どもの世話と事務の両立が難しく、作業を忘れるなどのミスを繰り返して落ち込んだ。受診した心療内科で広汎性発達障害と診断され、「どうすればいいのか分からなくて混乱し、人と会いたくなくなった」。



そんな時、学生時代の知り合いだった子育て支援団体のスタッフに打ち明け、「大変だったね」と受け入れてもらえたことが心の支えになった。「障害があるとわかって、自分は自分。ゆっくり向き合っていこう」

2015年2月、家族の近くで暮らそうと地元の鳥取に戻ったのを機に、「自分と同じ悩みを抱える人たちの助けになれば」と会の発足を思い立った。

交流会は月1回。発達障害などについての勉強会の後、参加者が自由に言葉を交わす。会場は、障害者支援のNPO法人「山陰福祉の会」(米子市)が運営する食堂「海の声」の座敷を借りている。毎回、同席するNPO理事長の山中裕二さん(37)は「当事者の悩みや意見は、支援する側にとっても有意義。支援の現場でのコミュニケーションに役立つ」と語る。

2年前に発達障害のひとつ、ADHD(注意欠陥・多動性障害)の傾向があると診断された米子市の自営業、足谷保典さん(39)は「この生きづらさは、経験した人にしか分からないと思う。『そういうこと、自分にもある』と共感できて、素の自分を出せる場所があるのはありがたい」と歓迎する。

亀山さんは「僕は医者でも専門家でもないから、症状を和らげたり、悩みを解消したりはできない。でも、当事者だからこそ、気持ちは理解できる。大変なこともあるけれど、『大丈夫だから、生きていこうよ』というメッセージを伝えられれば」と力を込める。

次回の「マイペース」は23日午後2～4時。問い合わせは亀山さん(090・6847・0160)。

音楽療法で高齢者生き生き 有田川町の老人ホームでコンサート

産経新聞 2017年12月10日

音楽や瞑想を楽しむことで高齢者に生き生きと過ごしてもらおうと、臨床心理士やピアノ講師らが9日、有田川町奥の特別養護老人ホーム「吉備苑」で音楽療法のコンサートを行った。入所者や利用者約30人が懐かしい音楽を口ずさんだり、子供の頃の思い出に浸ったりして楽しいひとときを過ごした。

県立医大神経内科の臨床心理士で有田市の大前泰彦さん(62)らが介護福祉施設などで行っているボランティア活動として実施。音楽を聴いたり、人生を振り返ったりして五感を刺激することの効果調べる研究の一環でもあるという。

ギターやピアノの演奏とともに、戦後のヒット曲「リンゴの唄」や「ケ・セラ・セラ」などが披露されたほか、四季の写真や古い映画の映像などで子供のころを思い出してもら

うという「イメージ回想法」が行われた。

風鈴の写真などで、幼少時代の夏を振り返った入所者の田中トシヨさん（96）は「同級生と毎日のように有田川で泳いだことを思い出し、懐かしい気持ちになった。音楽とともに楽しい時間を過ごせた」と話した。

障害者の工賃アップへ お歳暮セット受注

信濃毎日新聞 2017年12月10日



お歳暮セットを手にするこぶし園の利用者

飯田下伊那地方にある六つの障害福祉サービス事業所でつくるグループ「飯田下伊那倍増カフェ」が、知的障害などがある施設利用者が作った商品のお歳暮セットを受注している。利用者の工賃アップが大きな目的で、今年で10年目。新たな販路や施設間の結び付きを生むことにつながるなど、工賃以外の面でも成果をもたらしている。

セットには、ブルーベリージャム、トマトケチャップ、ラスク2袋、甘酒2種類、名古屋コーチンの卵の薫製、乾燥バジルを混ぜた食塩—の8品を詰めた。材料は施設利用者が栽培した物のほか、できる限り地元産の食材にこだわる。

グループの広報担当で、障害者就労支援事業所「こぶし園」（下伊那郡豊丘村）職員の小木曾優介さん（34）は「自信を持って売りたいと思ってみんな取り組んでいる。味もばっちり」と胸を張る。

グループは2008年に発足。各施設の担当者が月1回ほど集まり、セット内容の相談や商品のアイデアを出し合う。施設間の連携が強まるとともに、お歳暮セットを通じて商品が知られるようになり、各施設に単体商品の注文があるなど、販路開拓にもつながったという。

小木曾さんによると、こぶし園では、10年前は1人当たり平均月額1万円に届かなかった工賃が、昨年度は約2万2千円に上昇。他の施設でも工賃は上昇傾向という。

こぶし園利用者の小沼仁さん（22）は「自分が作った物がおいしいと言われるとうれしい」。同じく利用者の矢野俊夫さん（60）は、働いたお金で毎年1回野球観戦に行くのが楽しみで、次に行く時は「グッズも買いたい」と笑顔を見せる。

小木曾さんは「お歳暮の取り組みが事業所同士や、お客さんと施設の利用者をつなげるツールになっている。職員のやりがいにもつながった」と話している。

今季の注文は22日まで。1セット3千円。送料別（全国一律500円）。問い合わせはこぶし園（電話0265・35・8573）へ。

左派系の集會に潜入 「生活保護上げろ」の訴えで政権批判展開 隠された“不都合な真実”

とは 産経新聞 2017年12月9日

「生活保護基準を上げろ」というプラカードを上げる集會の参加者＝11月15日、東京・永田町の参院議員會館



参院議員會館（東京・永田町）に11月15日、300人以上が集結し「生活保護（基準）を上げろ」と訴える集會があった。生活保護基準は5年に1回見直されており、来年度がその時期に当たるため、政治闘争も激しさを増している。集會には長妻昭（57）＝立憲民主党、

山本太郎（43）＝自由党、福島瑞穂（61）＝社民党＝の左派系の各国会議員らも登壇。いつも通りの政権批判が展開された。生活保護制度は「命のとりで」であることは無論だ

が、彼らの訴えには制度の議論に必要な“不都合な真実”をわざと隠しているように見えた。
(11月28日の記事を再掲載しています)

「私たちの正義がかかった問題」と訴える憲法学者

集会は、前回(平成25年度)の生活保護基準の引き下げ取り消しを求めて、全国で提起された訴訟の関係者やその支援者たちが中心となって開かれた。

貧困問題に取り組む作家の雨宮処凜(かりん)さん(42)らを司会に、まず、憲法学者の木村草太氏の基調講演があった。



木村氏は「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」(生存権)を規定する憲法25条の意義や背景を解説するとともに、「数ある社会保障の中でも、生活保護は切羽詰まっていて、そのお金をもらえないと死んでしまうという命のかかった給付だ」と強調した。



基準引き下げの合理性に異を唱えた上で、「日本の経済体制を正義にかなったものにするために、生存権が保障されなくてはいけない。だからこそ、生存権保障は私たちの正義がかかった問題である。2018年の改定に向けて、世論を盛り上げなくてはならない」と結んだ。

山本氏「何ずうずうしいこと言ってんだ」

集会の折々では、国会議員が挨拶に立った。

長妻氏は「安全保障も命のとりでだが、生活保護も同じにもかかわらず、なんで国会でバッシングがおこるのか」と主張。山本氏も「憲法って守られてないですよねと、いわゆる『戦争法』のときに言われたが、そのずっと前から憲法25条が守られていないじゃないか。今ある憲法を守っていない人間が、何を憲法を変えたら、とずうずうしいこと言ってんだ」と聴衆をあおった。

福島氏は「来年度の予算は、防衛予算が5兆3千億円、自衛隊は2兆円で武器を購入し、毎年5千億円ずつ米国から購入している。社会保障の自然増を抑制して、生活保護をまたさらに下げるのかという議論になっている。憲法の25条を守れと、国会の中で奮闘していきたい」と批判した。

急増する受給、年間3・8兆円の税金

生活保護基準をただ「上げる」と叫ぶだけでいいのだろうか。制度を維持するために必要な議論が抜け落ちている。集会ではそれらについて全く触れられていなかったことは奇っ怪だ。

まず、今年3月の時点で生活保護を受けている世帯が約164万世帯と過去最多になっているというデータの存在が聞かれなかった。20年間で約3倍にも急増している。その中で最も多いのは、65歳以上の「高齢者世帯」で全体の半数以上に上る。このうち90%以上が一人暮らしの世帯だ。つまり、老後の生活をどうするか、年金だけで生活できない人をどう救うかという話である。この論点が欠けていた。

受給者の増加とともに、昨年度の当初予算では、生活保護のための費用は約3・8兆円(事業費ベース)に上る。10年前(約2・6兆円)から1・5倍にも増えた。このまま増加のペースを見過ごしては、制度維持が危うい。高齢者は特に医療費が多くかかり、保護費の半分を医療費が占める。こうした実情も集会では一片も聞かれなかった。

さらに問題は、保護費の不正受給だろう。これが生活保護のバッシングにつながっている。平成27年度の不正受給者数は過去最多の4万4千件、総額は169億円にもなる。全体から見れば、「少数」ともいえるが、こうした不正に目をつぶるようでは、制度への信頼が失われよう。

●「生活保護制度」＝生活に困窮する人に、その困窮の程度に応じて必要な保護を行い、健康で文化的な最低限度の生活を保障し、自立を助長することを目的とする。生活保護は

世帯単位で行い、世帯者全員が資産や能力などあらゆるものを、生活の維持に活用することが前提。扶養は生活保護に優先する。預貯金や生活に利用されていない土地や家屋は売却して、生活費に充てなければならない。

基準月額例（東京都内）は平成29年4月現在、3人世帯（33歳、29歳、4歳）＝15万8380円▽母子世帯（30歳、4歳、2歳）＝18万8140円▽高齢者単身世帯（68歳）＝7万9790円。

<わたしの道しるべ> I Tで介護の先進地に 河北新報 2017年12月10日



◎団体職員 名古屋聡さん（38）＝仙台市青葉区

仙台市産業振興事業団の仙台フィンランド健康福祉センターに勤務しています。福祉の先進国であるフィンランドと連携し、健康福祉産業の創出、育成に関わっています。

具体的な業務は、仙台圏の企業向けの介護機器・サービス開発コンサルティングや、試作品を試すための介護事業者のあっせん、企業に介護業界への進出を促すセミナーの開催です。

介護は人命を預かる尊い仕事ですが、現場は人手不足が深刻。一方で少子高齢化は加速しており、対策が急務です。この問題を解決する鍵はI Tにあると考えています。

企業の持つI T技術を介護に応用することで、業務を大幅に効率化できます。スタッフの負担軽減になる上、高齢者の自立を促す商品もできます。

10年前に比べると、介護に挑戦する企業が増えてきましたが、まだまだ足りません。企業と介護事業者の間を取り持って東北を介護の先進地にし、世界に発信できる機器やサービスを生み出していきたいです。

朝来で一足早いXマス催し 歌やゲームで盛り上がる 神戸新聞 2017年12月10日



子どもたちにお菓子を配るサンタクロース＝神戸聖隷歴史資料館

英語クイズでA L Tからヒントをもらう生徒たち＝生野高校
兵庫
県朝来



市内で9日、一足早いクリスマスイベントが開かれた。子どもたちはサンタクロースの登場に大喜びし、中高生は英語ゲームに頭を悩ませた。（長谷部崇、那谷享平）

■日本語禁止のクリスマス会 中高生らゲームの解答に苦勞

生野町真弓の生野高校では、市内の小中高に勤務する外国語指導助手（A L T）9人が、英語のゲームやクイズを企画。中高生43人を招いて盛り上がった。

同校や近隣の小中学校は、2014年度から文科省の「英語教育強化地域拠点」に指定され、連携して英語教育に取り組んでいる。クリスマスイベントもその一環で、夏の英語合宿と合わせ「授業で学んだ英語を実践で使う場」として2年前から開いている。

日本語は原則禁止で、生徒たちは「サンタクロースではなく『シンタクラス』のいる国はどこ？」などの英語クイズや英語版かるたに挑戦。英語圏のCMやアニメを見て内容を説明するゲームは難度が高く、「ペンギンがクライング」など日本語と“ごっちゃ”になってしまう生徒が相次いだ。ALTの助け舟で乗り切っていた。

夏の合宿に続いて参加した和田山中学校3年の生徒（14）は「言いたい言葉がスムーズに出てこなくて苦労するけど、楽しく学べて勉強になる」と話していた。

■サンタクロース登場に児童ら歓声 神戸聖隷歴史資料館

和田山町竹田の神戸聖隷歴史資料館では、地域の子どもたちを招いたクリスマス会があった。約30人が参加し、歌や物語の読み聞かせを楽しんだ。

同館を運営する社会福祉法人「神戸聖隷福祉事業団」（神戸市）が初めて開いた。

朝来市で活動する牧師が、聖書に記されたクリスマスの由来を子どもたちに分かりやすく紹介。和田山高校3年の生徒たちも歌を披露して子どもたちを喜ばせた。最後は赤い衣装を着たサンタクロースが、お菓子を配って回った。

マイナンバーカード申請が簡単に 写真無料撮影 秋田魁新報 2017年12月10日

マイナンバーカードの普及率を高めようと、秋田県横手市は今月から、カードの申請補助サービスを始めた。マイナンバーの通知カードと、免許証などの身分証明書を持参して来庁すれば、後日カードが自宅に届く。申請に必要な顔写真は職員が無料で撮影。書類を郵送したりインターネットの専用サイトにアクセスしたりする手間も省ける。期間は来年1月31日まで。

マイナンバーカードは電子的に個人を認証するICチップが付いており、身分証明書として使える。通常は、顔写真を貼った交付申請書を郵送するか、インターネット上の専用フォームからデジタルカメラなどで撮影した写真を添付して申請し、来庁してカードを受け取る流れになっている。

市市民課によると、10月末現在のカード普及率は6・7%。全国1741市区町村の中では1454位と下位に位置する。同課は、申請が進まない要因について「申請に義務や期限がないので、写真撮影が面倒などの理由で先延ばしにしている人が多い」と推測。申請の手間を軽減するため、サービスを始めた。

着床前スクリーニング 臨床研究開始へ NHKニュース 2017年12月9日

体外受精させた受精卵の染色体を調べ、異常がないものを選んで子宮に戻す「着床前スクリーニング」について、日本産科婦人科学会は不妊治療の過程で流産を減らすなどの効果があるか調べる本格的な臨床研究を、早ければ今年度中に始めると発表しました。「着床前スクリーニング」は現在、学会が禁止しているほか、命の選別につながる倫理的問題も指摘されていますが、学会では結果を踏まえて、方針を転換して実施を認めるか慎重に判断したいとしています。

不妊治療で体外受精させた受精卵の中には、染色体の異常が起き、これが原因となって子宮に着床しなかったり、流産したりすることが知られていて、「着床前スクリーニング」は、受精卵の染色体を解析して異常がないものを選んで子宮に戻す技術です。

日本産科婦人科学会はこれまで、国内では有効性が確認されていないとして認めてきませんでしたが、海外で効果があるとする報告が示されるなどしたため、国内でも実施できるよう方針の転換を求める声が学会の中からも上がり、ことし2月から、学会が、有効性を確かめる臨床研究を行う準備を始めていました。

そして学会は9日、定例会見の中で、「着床前スクリーニング」の本格的な臨床研究を、早ければ今年度中に開始すると発表しました。

臨床研究では流産が2回以上起きたり、体外受精が複数回成功しなかったりした女性を対

象に行い、流産が減って出生率が上がるか調べ、国内での実施を認めるか、協議することになっています。

「着床前スクリーニング」をめぐるのは、染色体の異常でおきるダウン症などの受精卵は子宮に戻されず、生まれないことになるなど、命の選別につながるとして倫理的な問題が指摘されています。

学会の倫理委員会の苛原稔委員長は「まずは有効性を調べるが、倫理的な課題もあり、実施を認めるかは慎重に協議したい」と話していました。

着床前スクリーニング 国内では実施認めず

「着床前スクリーニング」は、不妊治療のために体外受精させた複数の受精卵から細胞の一部を取り出して染色体の数を調べ、異常のない受精卵を選んで子宮に戻す新しい技術です。欧米では不妊治療の一環として行われていますが、日本産科婦人科学会は、流産を減らすなどの効果が十分に示されていないなどとして国内での実施を認めてきませんでした。



しかし、一部のクリニックで学会の規定を無視して「着床前スクリーニング」を実施していたことが明らかになり社会的な問題にもなりました。

その一方で「着床前スクリーニング」によって流産が減り、出生率が上がったとする海外の研究成果が報告され始めたことから、学会でも実施を認めるよう方針の転換を求める声上がり、3年前に効果を検証するための臨床研究を学会が実施することを決めました。そして、臨床研究を実施

するための準備の試験をことし2月から行って、どれくらいの規模でどのような人を対象に行うか検討を進めています。

「着床前スクリーニング」をめぐるのは、染色体の異常でおきるダウン症などの受精卵は子宮に戻されず、生まれないことになるなど、命の選別につながるとして倫理的な問題があるとして反対する声があるほか、流産などを防ぐための染色体の異常を見つける過程で受精卵の性別がわかってしまうために、男女の産み分けに使われることを懸念する指摘もあります。

不妊治療中の女性は

不妊治療を続けている一部の患者からは「着床前スクリーニング」の実施を認めてほしいという声が上がっています。

不妊治療をしている39歳の女性は4年前に結婚し、子どものいる家庭を思い描いていましたが、なかなか子どもができず、体外受精を行いました。これまで2度の流産を経験しました。流産した後、胎児の染色体を検査したところ、染色体の数に異常があり、医師からは「この異常が流産の原因ではないか」と告げられたといいます。

女性は「2回とか3回流産する人ってそんなに多くはないのに、なんでまた私なんだろうという気持ちでした」と話していました。

女性は「着床前スクリーニング」で、正常な受精卵を選んで子宮に移植することで、これまでのような流産を防ぎ子どもをもつことができるのではないかと考えています。

そして「子どもができたらいねの1点で結婚してからずっと思い続けているので、精神的にも着床前スクリーニングは実施してほしいと思います」と話していました。

ひとり親世帯、子の世話犠牲の恐れも 京都で貧困研究大会

京都新聞 2017年12月9日

学会「貧困研究会」の第10回研究大会が9日、京都市北区の大谷大で2日間の日程で始まった。「子どもの貧困の現状と政策的課題の検討」をテーマに、ひとり親世帯の生活の厳しさが議論されたほか、厚生労働省が示す来年度の生活保護費の一部減額方針について

も懸念が示された。

ひとり親世帯の子どもの生活の厳しさについて話す阿部教授 (京都市北区・大谷大)

大会は、来年度に社会、教育の両学部を開設する同大学との共催。研究者や市民ら約80人が参加した。

日本では7人に1人の子どもが相対的貧困にあるとされる中、首都大学東京の阿部彩教授は、東京都が昨年に行った子どもの生活実態調査でひとり親世帯の3割以上が生活困難だったと紹介。「親の仕事のため、子どもの世話が犠牲になっている可能性がある」と指摘した。

また、大妻女子大の林明子常勤特任講師は生活保護世帯の子どもを調べた結果を示し、「子どもの過重な家事の役割を軽減する支援が必要だ」と強調した。

厚労省が示す来年度の生活保護費見直しも議論になった。食費や光熱費などに充てる生活扶助費や、ひとり親世帯が対象の母子加算が引き下げられる方針で、日本女子大の岩永理恵准教授は「子どもの権利を考えることが重要だ」と述べた。



アートNPO工房ココペリ代表・米田昌功さん /富山

毎日新聞 2017年12月10日

アートNPO「工房ココペリ」代表の米田昌功さん＝富山県高岡市のアトリエで、鶴見泰寿撮影

障害者芸術、世界に広め 米田昌功さん(52)

既存の価値観に影響されず、独自の手法で生み出す芸術「アール・ブリュット」。フランス語で「生(き)の芸術」を意味し、日本の障害者の作品は、欧州などで注目を集め、世界的な評価を受けている。高岡市のNPO「障害者アート支援工房ココペリ」の代表を務め、県内の知的・発達障害を持つアール・ブリュット作家を発掘し、その活動や発表を支援している。

富山市出身。小学生の頃から宇宙船やロボットなど想像の世界をノートに描いた。



ドキュメンタリー映画 「じゅう劇場の瞬き」 障害それぞれ、光る演技 鳥取できょう まで上映 /鳥取

毎日新聞 2017年12月10日

鳥取市で上映が始まった「じゅう劇場の瞬き」＝鳥取市本町1で、阿部絢美撮影

障害のある人と一緒に演劇活動をする鳥の劇場のプロジェクト「じゅう劇場」を追ったドキュメンタリー映画の上映が9日、鳥取市本町1のギャラリー鳥たちのい



えで始まった。10日まで。映画は「じゅう劇場の瞬き」(山崎樹一郎監督、67分)。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

